ミス・シャーロック・ホームズの憂鬱

倉上由香

登場人物：

アイリーン・シャーロック・ホームズ　巷で名探偵として有名な人物。実は女性。
ハンナ・ジョン・ワトソン　元従軍看護婦。自分達を男性に変えて、事件の手記を発表。

ニール・ジョンソン　アメリカ人の富豪。イギリスに家を購入して住んでいる。
グレイス・バートン　ジョンソン家住み込みの家庭教師。若いイギリス人女性。
ロサ・ガルシア　マリアの従姉妹。ペルー人。マリアを頼って屋敷に居候している。

イヴリン・ヒース　ジョンソン邸のメイド。
ローラ・ハドソン　ジョンソン邸のメイド。
マーロウ・ゲイツ　ジョンソン邸の管理人。
リリー・クスバート　ジョンソン邸の料理人。

コヴェントリー　ウインチェスター警察の巡査部長。

マリア・ジョンソン　ニールの妻。ペルー人。情熱的で嫉妬深い。

マイクロフト・ホームズ　アイリーンの兄。アイリーン以上の切れ者で、政府高官。

時：十九世紀
場所：イギリスのロンドンおよびハンプシャー

シーンー：

十九世紀、ロンドン。ベーカー街。

新聞を持った男性（ニール）が、建物をうろうろと探している様子。
彼がそのまま探しながら去っていくと、舞台は転じてベーカー街のとある部屋に。

二人の女性が、二階の部屋の中から窓の外を気にしている。
一人は髪を首元で一つに束ね、男性用のシャツにスラックスを身に着けている。ホームズだ。
もう一人は動きやすい職業婦人特有の、清潔なブラウスに動きやすいロングスカート。ワトソンである。
ホームズはじっと窓の外を見ているが、ワトソンは手に持った荷物をほどいている。

ワトソン　「（包みの中から靴を取り出し）……今度は靴？」
ホームズ　「（靴をワトソンから取り上げながら）ああ、きたか。ありがとう」
ワトソン　「随分……踵（かかと）が高いみたいだけど」
ホームズ　「そうさ。これで男性の格好をしたときに、少しは体格をごまかせる」
ワトソン　「そもそも、男性の格好なんてする必要あるの？」
ホームズ　「それは、捜査上の秘密だ」
ワトソン　「この前は山高帽（やまたかぼう）と燕尾服（えんびふく）をおつくり遊ばしていましたけど」
ホームズ　「必要なんだよ」
ワトソン　「吸血鬼の仮装でもするの？」
ホームズ　「……！」

ホームズは目を見開きワトソンに何か言おうとするが、ワトソンは取り合わずに、靴をホームズから取り上げて棚にしまう。

ホームズは肩をすくめると、再び窓の外に目をやる。

ホームズ　「（ワトソンに）ほら、下。見てごらんよ」
ワトソン　「（包み紙をたたみながら）今、手が離せないんだけど」
ホームズ　「（ワトソンの言葉を無視して）さっきから行ったりきたりしている男性がいる」
ワトソン　「（うんざりしたように窓まで寄っていき）また？」
ホームズ　「誰かさんのおかげで、よく見かける風景だよね。大方、ベーカー街２２ーＢを探してるんだろうね」
ワトソン　「……普通に考えたら、大衆小説に本当の住所なんて載せないわよ」
ホームズ　「そんなことにも思い至らないくらい、よっぽど切羽詰まっているかもね。ほら、新聞を握りしめてる」

ホームズは窓から目を離し、ワトソンに向かって、

ホームズ　「さぁ、いつものテストといこう。きみはあの男性を案内して差し上げて」
ワトソン　「（面倒くさそうに）了解」

ワトソン、少し迷ってから手に持った紐をポケットに入れ、出ていく。
ホームズは楽しそうに身だしなみを整えて、少年の従僕のような容貌に変える。終わった頃にワトソンがニールを伴って戻ってきて、扉をたたく。

ホームズ　「どうぞ」
ワトソン　「失礼します」

ワトソンがニールを連れて入ってくる。

ワトソン　「お客様をお連れしました」
ホームズ　「こんにちは、サー。帽子をお預かりします」

ニール　「（帽子を手渡しながら）ええと、ホームズ氏はいらっしゃるかね……？」
ホームズ　「（それには答えず）何かお飲みになりますか？」
ニール　「いや、結構。ホームズ氏にお会いしたいのだが」
ホームズ　「お約束はございますか、サー？」
ニール　「申し訳ないが、約束はないんだ。取り次いでもらえるかい？」
ホームズ　「随分とお急ぎだったのですね」
ニール　「あ、ああ。いつもなら先に手紙か、せめて電報でも打ってから伺うんだがね、あまりに気が急いて……」
ホームズ　「そうでしょうね。上着とベストの色が合っていませんよ。南のほうからお越しですか？」
ニール　「（自分のベストを見ながら）ああ、ハンプシャーだが……どうして分かったんだ？」
ホームズ　「靴にはねている泥が、南のほう特有の、混じりけのある土のようですからね」
ニール　「詳しいんだな」
ホームズ　「そうでもありませんよ、ジョンソンさん。私くらいの観察眼を持った人は、結構います」
ニール　「どうして私の名前が……」
ホームズ　「ああ、もちろん。ハンプシャーからいらした依頼人。新聞記事を握りしめて、ちぐはぐなベスト、アポイントもなしに急いでやってくるほどですから、さだめし、話題の事件でにっちもさっちもいかなくなっている方でしょう」
ワトソン　「そうか、先週のあの事件ね」
ホームズ　「ま、決定打は帽子に書いてある名前ですけどね」

ニールは困惑したようにワトソンに向かう。

ニール　「ホームズ氏は……」
ワトソン　「（かしこまって）私はあなた様をご案内するよう仰せつかっただけでございます」

ニールは恐る恐るといった風にホームズを見る。

ニール　「君は……？」
ホームズ　「（口元だけで微笑んで）初めまして、ジョンソンさん。アイリーン・シャーロック・ホームズです」

ホームズは握手を求めて手を差し出す。ニールはかなり躊躇（ためら）った後、ホームズの手をとり握手する。

ホームズ　「まぁ、ぎりぎり合格。女性扱いは、しなくていいですよ」
ニール　「……ニール・ジョンソンだ」
ホームズ　「事件のことは耳にはさんでいます。奥様のことは、お気の毒でした」
ニール　「……お気遣い、ありがとう」
ホームズ　「彼女はミス・ワトソン。あの冗談みたいな話を書いている作家です」
ワトソン　「ハンナ・ジョン・ワトソンです」
ニール　「では、シャーロック・ホームズ氏というのは……」
ホームズ　「彼女の創作ですよ」
ワトソン　「実際の事件を書くわけにいかないので、男性を女性に変えたり、老人を青年に変えたり、ちょこちょこっと。ホームズも私も、女性だということで色々と面倒なこともございますから」
ホームズ　「それでも、かなりそのまま載せているけどね。名前とか」
ワトソン　「だって、考えるのが面倒だって言ったでしょう？」

ホームズは、どうでもよさそうに手を振って椅子に座る。

ニール　「ホームズ氏は、探偵ではないのかね……？」
ワトソン　「探偵です。ご心配なく」
ホームズ　「依頼の内容によりますけどね。面白くないと」
ワトソン　「あとは、女性だからって偏見がない方ですね」
ホームズ　「そういうこと」

ホームズ、ニールに向かって身を乗り出し、

ホームズ　「それで、何をお手伝いいたしましょうか？」
ニール　「まず、ホームズさん、この事件を解決してくれたら、好きなだけ報酬をお支払いすると約束しよう。金に糸目はつけない」
ホームズ　「新聞によると、事件は一応の解決をみたように書かれていますが」
ニール　「彼女は無実だ。何としてでも、疑いを晴らしてほしい」
ホームズ　「……彼女？」

ホームズはじっとニールを見つめる。

ホームズ　「私の調査料は、一定の基準に基づいています。それを変えることはありません」
ニール　「……金には左右されない、と言いたいのかね」

ホームズ、何も言わずに口の端だけで微笑みの形を作り、すぐに真顔になる。

ニール　「では、名声はどうだ。この事件を解決したら、イギリスだけでなく、アメリカに戻ってからも大々的に広めよう」
ホームズ　「せっかくですが、仕事柄、あまり名前が知られないほうが動きやすいんですよ」
ワトソン　「あまり有名になると、こうやって突然、依頼にくる方もいらっしゃいますからね」
ホームズ　「ワトソン。きみがそれを言う？」

ワトソン、澄ましたように口を押える。
ホームズはニールに向き直り。

ホームズ　「しかし、まぁ、こんな話は時間の無駄です。事実をお話しいただけますか？」

ニール　「新聞にある通りだ。一週間前の夜遅く、妻が屋敷から半マイル離れた橋の傍(そば)で、倒れて死んでいるのが発見された」
ホームズ　「頭をリボルバーで打ちぬかれていたんですね？」
ニール　「そうだ」
ホームズ　「ご気分を悪くされましたら、失礼します。ですが、依頼をうけるために必要な確認ですので」
ニール　「わかっている。夜十一時頃に遺体(いたい)が発見され、警察と医者がざっと確認したが、周辺に凶器は発見されなかった」
ホームズ　「奥様の服装は？」
ニール　「確か、薄い水色のドレスだったと思う」
ホームズ　「いくつかの物証があり、家庭教師の女性が逮捕されたということですね」
ニール　「……彼女はハエ一匹殺すことができない、心優しい女性なのだ」
ホームズ　「それは追々(おいおい)」
ニール　「……他に何か訊いておきたいことがあるかね？」
ホームズ　「そうですね、一つだけ。あなたと家庭教師の関係は、正確なところ、どうなっているんです？」

ニールは顔をこわばらせて、黙り込む。

ホームズ　「あなたは先ほど『彼女は無実だ』と言った。奥様が殺されたのに、他の女性を気にするのですか？」
ニール　「それを訊くのは、君の権利だと？」
ホームズ　「そう受け取っていただいて結構です」
ニール　「では申し上げよう。私たちの関係は、単に雇い主と従業員という間柄を出るものではない」

ホームズはドアのほうに向かい、

ホームズ　「失礼ですが、私はこれでも忙しい身でしてね。無駄話をしている暇はないのです。どうぞお引き取り下さい」
ニール　「どういう意味かね？　依頼を断るのか？」
ホームズ　「そうですね、ジョンソンさん。この事件はそうでなくても込み入っているようです。それをさらに不正確な情報によ

って惑わされては、たまったものではありませんから」
ニール　「私が嘘をついていると？」
ホームズ　「そうお取りになって構いません」

ニールはかっとなってホームズに拳（こぶし）を振り上げようとする。

ワトソン　「ジョンソンさん！」

ワトソンがニールとホームズの間に入り込み、ニールの振り上げた拳を両手で握る。

ワトソン　「ジョンソンさん、いけませんわ」

おもむろにワトソンがニールの拳を後ろ手に捻り上げる。

ニール　「いたたた……！」
ワトソン　「ジョンソンさん、か弱い女性に手をあげてはいけませんわ」
ニール　「か弱い、だと……？」
ワトソン　「か弱い、ですわ。私なんて、ちょっと力が強くて、ちょっとバリツをたしなむだけの、か弱い看護婦ですのよ」
ホームズ　「（たしなめるように）ワトソン」

ワトソン、ぱっとニールの手を放す。

ホームズ　「（ワトソンに向かって）ありがとう」
ワトソン　「どういたしまして」
ホームズ　「でもね、バリツじゃなくてバーティツだと思うよ」

ワトソン　「あらそう？」
ホームズ　「それで、ジョンソンさん、続きをどうぞ」
ニール　「……ミス・バートンとのことは、この問題にはまったく関係ない」
ホームズ　「関係ないかどうかは、私がうかがってから決めます」
ニール　「（苦笑して）厳しいな。だがホームズさん、たいていの男は、女性との関係をあけすけに訊かれたら動揺するだろうよ」
ホームズ　「それでも、真実を話してもらわないと先には進めません」

間。

ニール　「……私が妻と知り合ったのは、南米で投資のために鉱山を見に行っていたときだ。彼女は政府高官の娘で、たいそう美しくて、北米の女性とは大違いだった」
ワトソン　「それで、奥様に惹かれてご結婚なさったんですね」
ニール　「（うなずきながら）ところが新婚の甘い夢が覚めてみると、今更ながら、夫婦の間には何一つ共通するものがないのだよ。すぐに私から妻への愛情は冷めてしまったのに、妻は変わらず私に夢中でね」
ワトソン　「素晴らしい奥様じゃありませんか」
ニール　「……そうこうするうちに、うちの子供達の家庭教師にミス・グレイス・バートンが応募してきた。新聞に書かれているように、素晴らしい美女だ。強く惹かれるものを感じたのだよ。……ホームズさん、私を軽蔑（けいべつ）するかね？」
ホームズ　「そういった感情を持たれること自体は、特に非難しようとは思いません。ただ、それを口に出されたのだとしたら、間違っていると申し上げますね。あなたはその女性の給料を出している立場だったのですし」
ニール　「そういう考え方もあるか。でも私は、彼女を我が物にしたいということで頭がいっぱいだった。言ったよ、彼女に」
ワトソン　「まあ！」
ニール　「できるものなら妻と別れて彼女と結婚したかったが、こればかりは教会の許可がおりないからな。このさい金は問題じゃない。彼女に『君が何不自由なく暮らせるようにしてあげられるなら、どんなことでもしてみせよう』とね」
ホームズ　「愛人になれと言っているようなものじゃないですか」
ニール　「（怒って）君に道義うんぬんを言われる筋合いはない」

ホームズ　「いいですか、そもそも私がこの事件を引き受けるとしたら、ひとえにその女性の身を思えばこそ、です。金さえ出せばどんな罪も軽くなると思っている輩も多いようですが、世の中そんなに甘くはないですよ」
ニール　「……それは、わかっている。彼女は私を受け入れるどころか、すぐに辞職すると言い出したからな」
ワトソン　「その方は、どうしてお辞めにならなかったのです？」
ニール　「彼女には養うべき母親と兄妹がいるのだ。だから私も、今後は二度とそういったことは言わないと誓って、なんとか思いとどまってもらった。だが、その挙句（あげく）が、今回の事件だ」
ホームズ　「事件そのものについて、あなたの見解はありますか？」

ニールは少し考えてから

ニール　「女性は時として、男には思いもよらない行動に出ることがある。はじめは私も、ひょっとしたらとんでもないことをしてくれたのではないかと思ったが……」
ホームズ　「でも、今はそう思わないのですね」
ニール　「死んだ妻は異常に嫉妬深いたちだったのだよ。元々、妻にはアマゾンの熱い血がたぎっていたのでね。もしかしたらミス・バートンを殺してしまおうと思い詰めたのかもしれない。だが揉み合いになり、はずみで弾が発射されてしまい……」
ホームズ　「奥様にあたってしまった？」
ニール　「だが、ミス・バートンはそれをきっぱり否定しているのだ」
ホームズ　「例えば、そういう恐ろしい立場に立たされた女性が、無我夢中で銃を手に家に逃げ帰るというのは、考えられないことじゃない。さらに混乱して、自分が何をしているかも考えずにクローゼットに放り込んでしまうことも、それが発見されたら開き直って全てを否定して言い逃れようとすることもあり得ますよ」
ニール　「彼女はそういった人間ではない」

ホームズ、ニールの意見には興味がなさそうに扉へ向かう。

ホームズ　「恐らく、今日中に警察に許可を取って、明日にはそのお嬢さんの話を聞きに行けると思います。直接、話を聞いたら

何か新しい材料が出てくるかもしれません。ただ、そうして出てきた結論が、あなたのお気に召すかどうかは、わかりませんよ」

ホームズとワトソン、ニールを扉へ促す。

ニール　「それでも、彼女は無実だ」
ホームズ　「今日はこの後、どちらへ？」
ニール　「私も、ウインチェスターの彼女のところへ行く予定だ」
ホームズ　「そうですか。お屋敷のほうにも伺います。ではまた、後ほど」

ニール、去る。

ホームズ　「さぁ、ジョンソン氏が戻る前に彼の屋敷にお邪魔しよう」
ワトソン　「先にウインチェスターに行くんじゃないの？」
ホームズ　「スコットランドヤードと違って、そちらはどうせ許可を取るのに時間がかかる」
ワトソン　「顔パスというわけにはいかないわね」
ホームズ　「そういうこと。電報だけ打っておいて」

帽子をかぶりながら出ていく二人。

シーン２：

ハンプシャーのジョンソン邸。
ホームズは引き続き子供のような恰好。
ホームズが玄関のベルを鳴らすとメイドのイヴリンが扉を開ける。

イヴリン「どちらさまですか？」
ホームズ「（子供のような口調で）こんにちは。僕、ウィギンズといいます。シャーロック・ホームズさんのお使いできました」
ワトソン「姉のハンナです」
イヴリン「まぁ、シャーロック・ホームズさん！　それじゃあ、旦那様は本当にホームズさんのところに行きなすったんですね！」
ホームズ「はい。ご挨拶に伺ってくるようにと言われました。ホームズさんはお忙しいので、来られないのだそうです」
イヴリン「あんなに有名なお方だものねぇ。あなたのことも知ってますよ、ベーカー街の遊撃隊（ゆうげきたい）でしょう？」
ホームズ「はい。よろしくお願い致します」
イヴリン「礼儀正しいわねぇ」
ワトソン「きちんとしつけておりますので」
ホームズ「（皮肉気に）『新聞によく出るホームズさん』の名誉に関わりますからね」

ワトソン、ホームズをちらっと見てから澄ました顔をして

ワトソン「そうですわ」
イヴリン「（嬉しそうに）じゃあ、私らも新聞に載るかしら」
ワトソン「恐らく、載りますわね」

ホームズ、一瞬うんざりした表情をする。

イヴリン「でもねぇ、旦那さまはまだお戻りじゃないんですよ」
ホームズ「ジョンソンさんからは、ご訪問のお許しをもらってきました。事件のお話を伺っていいですか？」
イヴリン「旦那さまが良いっていうなら、それは構わないけど……奥様がお可哀想で」
ワトソン「皆さん、ショックが大きかったんですね」

イヴリン　「そうねぇ……あの子もそこまで大それたことはしなさそうに見えたけど」
ホームズ　「バートンさんのことですか？」
イヴリン　「そう、見た目だけはいいけど、堅物で、夢見がちで。なんでも『霊的なもの』とかいうのが大好きな、変わった娘ですよ」
ホームズ　「でもバートンさんのクローゼットから銃が見つかったんですよね？」
イヴリン　「旦那様の銃ですけどね」
ホームズ　「ジョンソンさんの？」
イヴリン　「ペアで持っていらっしゃった片方だけ、見つかったんですよ」
ホームズ　「もう片方は？」
イヴリン　「さあねぇ。どうしたのか……」

屋敷の奥からロサがイヴリンに声をかける。

ロサ　「お客様なの？」
イヴリン　「（振り返って）ガルシア様」

ロサが赤のドレスに黄色のショールを巻いて、玄関まで出てくる。

ホームズ　「（ロサに向かって）こんにちは、マダム。この度は大変にお気の毒なことで、お悔やみ申し上げます」
ロサ　「どうも」
ホームズ　「僕はウィギンズといいます。ジョンソンさんの依頼で、シャーロック・ホームズさんの代わりに事件のことを伺いに来ました」
ワトソン　「姉のハンナと申します」
ロサ　「まあ、シャーロック・ホームズですって？　ニールったら、なんてことを」
ワトソン　「どうかされましたか？」

ロサ　「マリアのことは不幸でしたが、これ以上この家の恥を撒(ま)き散らしたくはございません」
ワトソン　「失礼ですが、奥様は……？」
ロサ　「ロサ・ガルシアです。マリアの父方の従姉妹(いとこ)ですわ」

ホームズとワトソン、顔を見合わせる。

ワトソン　「失礼いたしました、ガルシア様。私共はジョンソンさんのたっての依頼で、こちらへ訪問させていただいておりますの」
ロサ　「ニールも、あんな娘(むすめ)に情けをかけて余計なことを」
ホームズ　「ですが、ジョンソンさんは、バートンさんをとても気にかけていらっしゃいましたよ」
ロサ　「ニールは優しいんですの。雇い主に横恋慕(よこれんぼ)するような、あんな女でも、とても気遣っているんです。そのせいで変に気を持たせて、こんなことになってしまったのですわ」
ホームズ　「バートンさんは、ジョンソンさんがお好きだったんですか？」
ロサ　「好きもなにも、あんなにべったりくっついて、あれじゃあマリアも誤解します」
ホームズ　「亡くなった奥様は、ご主人とバートンさんのことを疑っていたのですね？」

ロサ、冷ややかにホームズを見て。

ロサ　「……私、おしゃべりが過ぎたようですわ。ニールが許可したならお好きになさればよいですけど、私は他に申し上げることはございません」

ロサ、屋敷の奥へ去っていく。

ホームズ　「（イヴリンに）あの方はどういった方ですか？　ジョンソンさんは、何も言っていませんでしたけど」

イヴリン　「ガルシア様はペルーで不幸があったらしくて、奥様を頼ってイギリスまでいらっしゃったんですよ」
ワトソン　「ガルシアさんのお召し物は、なんというか……大変カラフルでいらっしゃいますね」
イヴリン　「いつも奥様がチェックして差し上げていたんだけど、今回の不幸の後からは、お手伝いをしようとしても嫌がって……」
ワトソン　「時々、そういう方もいらっしゃいますね」
ホームズ　「それはそうと、ジョンソンさんのお話では、彼がバートンさんに夢中だったようですが……」
イヴリン　「そうですねぇ。グレイスは嫌がってましたよ。でも……」
ワトソン　「本当は嫌がっていなかったんですか？」
イヴリン　「それが、旦那様が自分の望みを何でも聞いてくれると気づいてからは、大胆にねだっていて」
ホームズ　「どんなものですか？　宝石とか？」
イヴリン　「いえ、そういうのじゃなくて、慈善事業（じぜんじぎょう）への寄付とか……」
ホームズ　「慈善事業……」
イヴリン　「変わった娘でしょう？　それでも、そのために結婚している男性に気を持たせるっていうのは、感心することではないですけどね」

奥からメイドのローラの声が聞こえる。

ローラ　「イヴリン、帽子はなかったわよ」
イヴリン　「あら、じゃあどこにやったんだろう？」

ローラ、奥から出てくる。

ローラ　「お客様ですか？　失礼しました」
ホームズ　「いえ、お邪魔してすみません」
イヴリン　「シャーロック・ホームズさんのお使いだよ。ええと……」

ホームズ　「ウィギンズです」
ワトソン　「ハンナですわ」
ローラ　「ああ、旦那様は本当に行っちゃったのねぇ」
イヴリン　「そうなんだよ」
ホームズ　「先ほどの、帽子というのは？」
イヴリン　「いえね、奥様の帽子が一つなくなっていて、探してるんですけどね」
ホームズ　「奥様の？」
イヴリン　「そうなんですよ。奥様は……（言いにくそうに）撃たれた時は、水色のお召し物だったんですけどね、水色の帽子はちゃあんとあるんだけど、紫のがねぇ」
ローラ　「でも奥様は、お国柄か、あまり夜に帽子をかぶることはなかったんですけど」
イヴリン　「だけど、あの日から見当たらないんだよ」
ローラ　「庭で風に飛ばされたんじゃないの？」
イブリン　「あの日は、昼は白のドレスをお召しだったよ。紫の帽子なんか、かぶるもんか」
ホームズ　「どちらをお探しだったんですか？　お心当たりの場所を、お探しだったんでしょう？　お手伝いしましょうか？」

イヴリンとローラは目配せをしあって、

イヴリン　「それは……」
ローラ　「ガルシア様のお部屋ですよ。あ、ガルシア様はお会いになりましたか？」
ホームズ　「ええ」
イヴリン　「……ガルシア様は、奥様のものをすぐに欲しがりますのでね」
ローラ　「でもさすがにこんな時に、奥様のものをくすねるようなことはしなかったみたいです」
イヴリン　「（咎めるように）ローラ」
ローラ　「だって、本当のことでしょ？」
ホームズ　「ガルシアさんと奥様は、仲が悪かったのですか？」
ローラ　「そうでもないです。ガルシア様は奥様に我がままを言っていましたが、奥様はガルシア様を非常に愛していらっしゃい

ましたよ」
イヴリン　「同郷（どうきょう）のお身内ですからねぇ」
ワトソン　「お寂しかったんですね」

一同、しんみりする。

ホームズ　「それじゃあ、今日はご挨拶に伺っただけですので、また後ほど寄らせていただきます」
イヴリン　「あら、そうですか？　こんなところで立ったまま、申し訳ありませんね」
ホームズ　「いえ、次に来るときには、使用人の皆さん全員にもお話を伺いますので」
ローラ　「じゃあ、皆に伝えておきますね」
ホームズ　「それでは、失礼します」
ワトソン　「失礼いたします。また、よろしくお願いいたします」

ホームズとワトソン、去る。

シーン３：

ウインチェスターの警察署。
ホームズとワトソンが廊下を歩いている。

ワトソン　「結局、昨日の話でわかったのはジョンソンさんがミス・バートンに夢中だっていうことと、ミス・バートンがそれを利用してジョンソンさんに寄付をさせていること、ジョンソン夫人の従姉妹がミス・バートンを嫌っているということ、かしら？」
ホームズ　「それと夫人の帽子だね」

ワトソン　「帽子？　そんなに重要な話だった？」
ホームズ　「まだわからないよ。他には、夫人が愛情深い女性だったというのは、わかったかな」

二人、面会室の扉が開くと中へ入る。

ホームズ　「はじめまして、ミス・バートン。ジョンソンさんの依頼であなたの話を伺いにきました」
グレイス　「え、ホームズ、さん……？」
ホームズ　「（ワトソンに向かって）ほら、君のおかげで毎回毎回このくだりだ。（グレイスに）アイリーン・シャーロック・ホームズです。こちらは、あの馬鹿げた話の作者のミス・ワトソン」
ワトソン　「ハンナ・ジョン・ワトソンです」
グレイス　「あの、お二人とも『ミスター』ではないですよね……」
ホームズ　「見ての通り、女性ですよ」
グレイス　「でも、警察の方は何も言っておりませんでしたわ」
ホームズ　「一応、私が女性だということは秘密ですので」
グレイス　「でも、アイリーンって……」
ホームズ　「あなたもあの馬鹿な、ウケ狙いのラブロマンスを信じているクチですか？」
グレイス　「ウケ狙い……」
ホームズ　「この人が悪ノリして書いた創作ですよ」
ワトソン　「悪ノリだなんて失礼な。読者の希望に応えただけです」
グレイス　「では、あれは架空のお話でしたのね」
ワトソン　「全てが架空ではございませんよ。味付けをちょっとだけ」
ホームズ　「おかげで名乗るたびに訊かれる」
ワトソン　「いいじゃない。私とのロマンスと言われるより」

ホームズ、心底嫌そうな顔をする。

グレイス　「（笑いながら）まあ、こんなに楽しい方たちだとは思いませんでしたわ」
ワトソン　「女性にはサービスするんですよ」
ホームズ　「それでは、事件のことをお聞かせ願いますか？」

ワトソン、メモを取り出して構える。

グレイス　「……ジョンソンさんから、私どもの関係は伺っておいででしょうね」
ホームズ　「はい」
グレイス　「でも、誓って、私たちの間にやましいことはなかったのです」
ホームズ　「何をもって『やましい』というのかは置いておくとして、それならどうして法廷でそれが明らかにされなかったのです？」
グレイス　「まさか、こんなことが長く続くとは思わなかったのです。待っていれば、自然に時が解決してくれると思っておりましたから、あえてご一家の痛ましい事情をさらけだすこともないだろう、と……」
ホームズ　「考えが甘かったですね」
グレイス　「……」
ホームズ　「いいですか、ミス・バートン。くれぐれも幻想はいだかないようにお願いします。目下のところ、全てはあなたにとって不利な状況にあります」
グレイス　「わかっております」
ホームズ　「真実に到達するために、あなたご自身にもご協力いただかないと」
グレイス　「申しますわ、包み隠さず」
ホームズ　「ではまず、ジョンソン夫人との関係が、実のところどうだったかをお聞かせください」
グレイス　「……奥様は私を憎んでおいででしたわ。激しい気性の方で、ありったけの憎しみを私に向けていらっしゃいました」
ワトソン　「ご主人を愛していらっしゃったでしょうからね」
グレイス　「ご主人と私の関係を誤解なさっていたのです」
ホームズ　「誤解だと？」
グレイス　「（うなずいて）亡くなった方を悪くは言いたくございませんけれど、ご主人を愛していたあまり、私とご主人の間に

あるスピリチュアルな結びつきに理解が及ばなかったようです」
ホームズ　「なるほど」
グレイス　「私がお屋敷に留まっているのも、ひとえにご主人に善い行いのために尽くしていただきたいからだ、ということも、ご理解いただけなかったようですわ」

ホームズはムッとしながら、いきなり部屋の中を歩き始める。いつものことなので、動じないワトソン。

ホームズ　「そうですか、よくわかりました」
グレイス　「もっとも、私がおいとまをいただいていたとしても、あの奥様ではご一家の不幸が解消されたかどうか……」
ホームズ　「（グレイスのほうは全く見ずに）それでは、次に事件のことを詳しくお聞かせください」
グレイス　「あの晩にトール橋に出向いた理由でございますが、実は当日の朝、奥様からお手紙をいただきました」
ワトソン　「手紙？」
グレイス　「はい。お夕食後にあの場所で会ってもらえないか、大事な話がある、と。また、このことは誰にも知られたくないので、読んだ手紙は焼却して、返事は庭の日時計の上に置いておくように、とのことでした」
ホームズ　「その通りにしたのですか？」
グレイス　「ええ。ジョンソンさんは、普段から奥様につらく当たられていたので、それでご主人を恐れて過剰な用心をなさっているのだと思っておりましたの」
ホームズ　「それなのに、夫人はあなたからの返事を最後まで手に握っていたのですね」
グレイス　「そうなのです。亡くなったときにそれを握っていたと聞いて、本当にびっくりいたしました」
ホームズ　「なるほど。で、それからどうしました？」
グレイス　「お約束通り、出かけていきました。行ってみると、奥様はもうお待ちでした。――うかつなことですけど、私、その瞬間まで、奥様がそれほどまでに私を憎んでおいでだとは気が付きませんでした」
ワトソン　「それは本当にうかつでしたわね」
グレイス　「恐らく、気がふれていらしたのだと思います。あえて内容は申し上げませんが、恐ろしい言葉を投げつけてこられました。私は言い返すこともできず、奥様のお顔を見るのさえ恐ろしくて、ただただその場から逃げ出すのが精一杯でした」
ホームズ　「夫人が撃たれたのがあなたの逃げ出した直後だったと仮定して、戻る途中で銃声は聞こえなかったのですね？」

グレイス　「はい、何も聞こえませんでした」
ワトソン　「そのままご自分の部屋に逃げ帰って、朝まで？」
グレイス　「いいえ、奥様がお亡くなりになったという知らせが届いたとき、他の人たちと一緒に外へ出ました」
ホームズ　「そのとき、ジョンソンさんを見かけましたか？」
グレイス　「ええ、ちょうど橋から戻っていらっしゃったところでした」

ホームズは立ち止まって、グレイスを見る。

ホームズ　「ではいよいよ、肝心な点です。あなたの部屋からみつかった拳銃ですが、以前にそれをご覧になったことはありますか？」
グレイス　「いいえ、ございません」
ホームズ　「銃を発見されたのはいつですか？」
グレイス　「あくる朝、警察が家宅捜索をした時です」
ホームズ　「あなたのクローゼットの中にあったのですね？」
グレイス　「はい。底のほうにありました」
ホームズ　「いつ頃からそこにあったのか、見当はつきますか？」
グレイス　「前日の朝に中を整理した際には、ございませんでした」
ホームズ　「となると、その後に何者かが部屋に忍び込んで、拳銃を隠したということになりますね」
グレイス　「そうなりますでしょうね」
ホームズ　「いつのことだと思いますか？」
グレイス　「お食事の間か、私がお子さん方と勉強部屋にいる時、でしょうか」
ホームズ　「夫人から手紙を受け取ったのと同じとき？」
グレイス　「ええ、そのときか、あとは午前中いっぱい」
ホームズ　「ありがとうございました、ミス・バートン。ほかに何か、お気づきになったことはございませんか？」
グレイス　「あいにくと、何も」
ホームズ　「そうですか。ではまたご連絡します。近いうちに、何かニュースをお伝えできると思いますよ」

ホームズとワトソン、一礼してその場を去る。

シーン４：

トール橋付近。

ホームズとワトソンは、事件現場に向かって歩いている。

ワトソン　「ミス・バートンは無実だと思う？」

ホームズ　「まだ、わからない。ただ、人を撃った拳銃を、自分のクローゼットに放り込んでそのままにしておくような人物が、犯人とは思えないけどね」

ワトソン　「でも彼女は、ジョンソンさんとは何もないと言っていたし」

ホームズ　「相変わらず女性に甘いね。精神的な結びつきは不貞ではないと？」

ワトソン　「そういうわけではないけど……」

ホームズ　「まぁ、彼女の倫理観（りんりかん）はどうでもいいけど、彼女の夫人に対する優越感（ゆうえつかん）は、見ていて気持ちのいいものではないね」

橋の中ほどまでくると二人は立ち止まる。

ホームズ　「（手をたたいて）さて。遺体（いたい）の発見現場まで来たわけだが……」

ホームズはキョロキョロとあたりを見回す。ワトソンはメモを取り出す。

ホームズ　「橋の欄干（らんかん）からは離れてるのか……。（遺体のあった場所まで歩いていき、ワトソンに向かって）弾は、至近距離から

発射されていたんだったね」
ワトソン　「そう。右のこめかみの、すぐ後ろよ」
ホームズ　「争ったあとはなし、他の痕跡（こんせき）も一切なし。凶器もなし。あったのは遺体の左手に握りしめたミス・バートンのメモだけか」
ワトソン　「（メモを読み上げて）九時にトール橋で。グレイス・バートン」
ホームズ　「大体、メモは待ち合わせよりずっと前に届いたはずなのに、どうして何時間も握りしめてるんだ？　ありえないだろう？」
ワトソン　「そういわれればそうよね。誰かが握らせたとか？」

ホームズ、答えずに遺体のあったところに仰向けに寝転がる。

ホームズ　「（起き上がって欄干に寄っていき）これは何だ？」

ワトソン、ホームズの傍（そば）によって同じ個所を見つめる。

ワトソン　「通行人の仕業でしょう？」
ホームズ　「まだついてからそんなに経ってない。これだけのキズは、人が叩いたくらいじゃつかないはずだよ」

ホームズは手すりを叩く。

ホームズ　「それに位置もおかしい。上から打ち下ろしたんじゃなく、下から打ち上げた形になっているよ」
ワトソン　「ああ、下側の角が欠けているのね」
ホームズ　「遺体のあった場所からは十五フィート……。どういう意味だ……？」
ワトソン　「足跡も特に見つからなかったようだし、関係ないんじゃない？」
ホームズ　「そうかもしれない。でも何かひっかかる……」

ホームズ、考え込むように歩き回る。

ホームズ　「遺体から十五フィート、下から打ち付けたキズ、見当たらない凶器……」
ワトソン　「それに、手に握られたメモもね」

ホームズ、立ち止まってワトソンの顔を凝視する。

ホームズ　「そうか……。ワトソン、すごいぞ！」
ワトソン　「ええ？」

ホームズ、辺りを見回して、

ホームズ　「ええと……（石を拾い上げて）これと、あと……（木の枝を拾い）これでいいか」

ホームズ、ワトソンに向き直り、

ホームズ　「まさかきみ、長い紐みたいなものは持っていないだろうね？」
ワトソン　「（ため息をつき）いくら私でも、そんなものは持ち歩いたりはねぇ」

ワトソン、ポケットから紐を取り出し。

ワトソン　「するんですね、これが」
ホームズ　「ブラボー、ワトソン！　これだからきみの友人は辞められないんだよ」
ワトソン　「それはこっちのセリフよ」
ホームズ　「（受け取った紐を石と木の枝に括りつけながら）それにしても、どうして紐なんか持ち歩いていたんだい？」

ワトソン　「秘密、と言いたいところだけど、この前、届いていた荷物をほどいて、後で捨てようと思ったままポケットに入れっぱなしになっていただけよ」
ホームズ　「うーん、ズボラなきみのなんと輝かしいことか」
ワトソン　「あなたがそれを言いますか」

ホームズ、紐の片方の端に石を括り付け、反対の端に木の枝を括り付けたものをワトソンに見せる。

ホームズ　「本当はね、実際の銃を使って実験したほうが信ぴょう性があるんだけど……原理はこれでもわかるだろう」
ワトソン　「私は小説のドクター・ワトソンと違って、銃は持ってないわよ」
ホームズ　「わかってるよ。あんな、銃をこれ見よがしに振り回すような女性がいたら、危なくて仕方がない」

ホームズは橋の手すりの外側に石をそっとぶら下げると、反対側の木の枝を持って、そこから数歩離れた場所に立つ。

ホームズ　「いいかい、これを銃と仮定する」
ワトソン　「木の枝を？」
ホームズ　「ああ。実際にはきちんと計算して重さや紐の長さを測らないと駄目だけど、今はこれで問題ない。紐の反対側には重しをつけて、手すりの外にぶら下げておく。それから遺体のあったのは十五フィート先だけど、この紐の長さはそんなにないので、ま、ギリギリでいいか」
ワトソン　「……ああ、そういうこと」
ホームズ　「さあ、いくぞ！」

ホームズは自分の頭に木の枝をあてがい、撃つような真似をすると手を離す。
木の枝は石の重みに引っ張られ、手すりにぶつかってから飛び越えて川に落ちる。

ホームズ　「見たまえ、きみの紐が難問を解決してくれたよ」
ワトソン　「私の紐じゃ、ないけどね」

ホームズ　「さあ、警察へ行こう。川をさらってみれば、拳銃と紐と重しが見つかるはずだ。復讐心（ふくしゅうしん）にかられた奥方が、自分の死を恐ろしい殺人に見せかけ、無実の犠牲者になすりつけようとした小道具だよ。ただし、メモを握りしめていたのはやりすぎだった」
ワトソン　「自殺だったのね……！」
ホームズ　「そう。……許せなかったのだろうね」
ワトソン　「お気の毒に」

間。

ホームズ　「さて、ミス・バートンの冤罪（えんざい）を晴らしに行きますか」
ワトソン　「そうね」
ホームズ　「終わったら、《スティーブンス》で祝杯をあげよう。あそこはターキーが美味しいんだ」

ホームズとワトソン、去る。

エンディング風に音楽が流れるが、途中でぷつりと消える。
同時に明かりが消える。

シーン5：

再び明かりがつくと、ベーカー街のホームズたちの部屋。
ソファに横になって眠っているホームズ。

階段を上がってくる足音が響くと、マイクロフトが杖を突きながら部屋に入ってくる。

マイクロフト　「寝ているのか……。またこんな格好をして……」

マイクロフトが少し後ずさる。

ホームズに背を向けると、頭痛をこらえるように頭を抱え、そのまま杖から手を放す。杖が倒れると背筋を伸ばし、コートのポケットから細長い箱を取り出す。

ホームズに向き直って一歩踏み出すと、マイクロフトはホームズを覗き込んで何かをしようとする。

ワトソンがショールを持って、マイクロフトの背後から現れる。

ワトソン　「ミスタ・マイクロフト・ホームズ」

マイクロフトの動きが止まる。

ワトソン　「ミスタ・マイクロフト・ホームズ。何かご用でしょうか？」
マイクロフト　「（箱をポケットに戻しながら）ああ、ミス・ワトソン。シャーロックにちょっとね」
ワトソン　「……その箱はなんですの？」
マイクロフト　「ああ、いや、南米産の葉巻をね」
ワトソン　「ここは禁煙ですわ」
マイクロフト　「そうだったか？　これは失礼したね」
ワトソン　「どうやって入っていらっしゃいましたの、ミスタ・マイクロフト・ホームズ？」
マイクロフト　「ハドソン夫人に入れてもらったよ」
ワトソン　「ミスタ・マイクロフト・ホームズ、ハドソン夫人は今日は外出して、家にはおりませんわ」
マイクロフト　「……」
ワトソン　「ミスタ・マイクロフト・ホームズ、もう一度訊きますわ。何かご用でしょうか？」
マイクロフト　「（含み笑いをしながら）子猫を守る親猫のようだな」

ワトソン　「あなたは子猫に危害を加えるカラスのようですわね」
マイクロフト　「そんなつもりはないよ。ジェイムズ・フェリモア氏を探してもらいたかったのだがね。もう事件は終わったのだろう？」
ワトソン　「よくご存じですね」
マイクロフト　「この状態のシャーロックを見ればね。だが、少々早かったようだ」
ワトソン　「どういうことですの？」
マイクロフト　「すぐにわかるさ」

マイクロフト、笑いながらワトソンの横を通って出て行こうとする。

ワトソン　「ミスタ・マイクロフト・ホームズ、先ほどは箱の中身で何をしようとしていましたの？」

マイクロフト、足を止める。

ワトソン　「いえ、今はミスタ・モリアーティとお呼びしたほうが良いかしら？」

マイクロフト、振り返ってワトソンをじっと見る。

ワトソン　「杖をお忘れですわ、ミスタ・マイクロフト・ホームズ」
マイクロフト　「（馬鹿にしたように笑って）プロフェッサーだよ、ミス・ハンナ・ワトソン」

マイクロフト、杖を拾い上げるが使わずに去る。

ワトソンは急いでホームズの傍に寄る。

ワトソン　「（軽く揺すって）アイリーン」

ホームズ　「うん……？」
ワトソン　「頭痛はどう？」
ホームズ　「ああ、少しはマシになった……」
ワトソン　「（ショールを膝にかけて）事件のたびに興奮するのは、あまり体に良くないわよ」
ホームズ　「仕方がないだろう？　何か見落としがあると大変だから、これでも気を遣ってるんだよ」
ワトソン　「とりあえず、落ち着いて少しゆっくりしなさい。あとは、銃さえみつかれば、ミス・バートンは釈放されるんだから」
ホームズ　「……さっき、アイリーンって呼んだ？」
ワトソン　「……」
ホームズ　「もしかして、兄さんが来てた？」
ワトソン　「……シャーロックに用事があったようよ」
ホームズ　「……モリアーティの人格のほうか」
ワトソン　「もう帰ったわよ」
ホームズ　「次は起こして」

ワトソンは答えない。
ホームズはため息をついて立ち上がり、窓から外を見て郵便配達員を見つける。

ホームズ　「（振り返らずに）ワトソン、電報だ。ウインチェスターからだろう」
ワトソン　「ああ、拳銃についてね。受け取ってくるわ」
ホームズ　「よろしく」

ワトソン、部屋を出ていく。
ホームズはその場で頭痛をこらえている。

ワトソンが電報と小包をいくつか持って戻って来る。

ワトソン　「（電報を渡しながら）予想通り、警察からよ」
ホームズ　「ありがとう。ああ、しばらく小包の紐は取っておいてくれよ。できたら、きみのポケットに」
ワトソン　「い・や・よ」

ホームズは電報を開くとソファに寝転んで読み始め、次第に険しい表情になる。体を起こして電報を凝視（ぎょうし）すると、おもむろに立ち上がった。

ホームズ　「行くぞ、ワトソン」
ワトソン　「どうしたの？　拳銃（けんじゅう）が見つからなかった？」
ホームズ　「いや、拳銃は見つかった。だけど、弾は一発も発射されていなかったんだ」
ワトソン　「……どういうこと？」
ホームズ　「恐らく、自殺しようとした夫人を殺した者がいるってことさ。参った、私のミスだ」

ホームズ、帽子を取ってくる。ワトソンも慌てて帽子とカバンを取ってきて、

ワトソン　「じゃあ、やはりジョンソン夫人は殺されたってこと？」
ホームズ　「恐らくね」
ワトソン　「ミス・バートンが？」
ホームズ　「わからない。もう一度調べなおさないと」
ワトソン　「頭痛は？　大丈夫？」
ホームズ　「終わっていないのに、そんなことを言っていられないよ」
ワトソン　「薬は？」
ホームズ　「頭が鈍るからいらない。大丈夫、事件が薬だ」
ワトソン　「ハンプシャーね」
ホームズ　「まず、ジョンソンさんの屋敷に行く。話を聞きに行くと言っておいてよかったよ」

ホームズとワトソン、部屋を出ていく。

シーン6：

ジョンソン邸の玄関前。
ホームズは少しイライラした様子で、ドアベルを鳴らす。

ローラ　「（ドアを開けながら）はい、どなた様ですか？」
ホームズ　「こんにちは、ローラさん。お話を伺いにきました」
ローラ　「あら、ホームズさんのお使いの……」
ホームズ　「ウィギンズです」
ローラ　「そう、ウィギンズさん。……この前とは少し感じが違いますね」
ワトソン　「（慌てて）この子ったら、歯痛なんですの。虫歯で」
ホームズ　「（ムッとしながら）……そうなんです」
ローラ　「あら、つらそう。歯は大事にしなくちゃ駄目ですよ」
ホームズ　「……ご忠告、いたみいります」
ワトソン　「今日は、皆さんお揃いでしょうか？」
ローラ　「それが、イヴリンは外に出ていて。管理人のゲイツさんと、料理人のクスバートさんしか、おりませんの」
ホームズ　「イヴリンさんというのは、先日お話を聞かせてくださった方ですね？」
ローラ　「ええ。ガルシア様のお買い物の、お供なんです」
ホームズ　「では、ガルシアさんもいらっしゃらない？」
ローラ　「はい」
ワトソン　「そういえば、帽子はみつかりましたか？」

ローラ　「それが、昨日、川をさらったら出てきたと巡査部長さんが持ってきてくださったんです。ひどく汚れていて、もう使えないですが……」
ホームズ　「……帽子は、当日まであったとおっしゃっていましたよね？」
ローラ　「イヴリンは、そう言ってます。奥様の夕食前のお着替えをご用意したときにはあったって。でも、あたしは勘違いじゃないかと思うんですけど」
ホームズ　「ガルシアさんは、いつもジョンソン夫人の服や小物を身に着けていた？」
ローラ　「そうです。お二人ともサイズは同じですから。ガルシア様は、奥様のご親戚ですけど、ご自分のお金は持っていらっしゃらなかったので、こう言ってはなんですが、奥様に『たかって』おいでした」
ホームズ　「同じサイズ……」
ローラ　「あら、こんなこと言うとイヴリンに怒られちゃう。内緒にしてくださいね」
ホームズ　「……」

ホームズ、じっと考え込む。

ワトソン　「（ホームズを横目で見て）それで、ゲイツさんとクスバートさんにもお話を伺えますか？」
ローラ　「ああ、はい。お待ちくださいね、呼んでまいります」

ローラ、屋敷の中へ去る。

ワトソン　「何か気付いた？」
ホームズ　「……これから頭を打ちぬこうとする人間は、帽子をどうするだろうか？」
ワトソン　「……帽子を脱ぐか、最初からかぶっていないと思うわね」
ホームズ　「水色のドレス、紫の帽子……」

ゲイツとクスバートがローラに連れられてやってくる。

ゲイツ　「お待たせいたしました。ホームズさんのお使いの方だとか」
ホームズ　「ああ、ウィギンズです」
ワトソン　「ハンナと申します」
ゲイツ　「管理人のマーロウ・ゲイツです。こちらは料理人のリリー・クスバートになります」
クスバート　「こんにちは」
ゲイツ　「今日はどのような……」
ホームズ　「皆さんからお話を少し。それからジョンソンさんがお持ちの銃についても、うかがえますか」
ゲイツ　「かしこまりました。何からお話ししましょう？」
ホームズ　「その前に、ローラさん、事件当日のガルシアさんのドレスの色は覚えていらっしゃいますか？」
ローラ　「ガルシア様の？　いえ……」
ゲイツ　「確か、昼間は薄い紫で、夜は緑だったと思います」
ホームズ　「そうですか。ありがとうございます。バートンさんの服も、覚えていらっしゃいますか？」
ゲイツ　「ミス・バートンは青いお洋服をお召しでした」
ローラ　「それが何か、事件に関係あるんですか？」
ホームズ　「いえ、まだ何も。念のためです。ホームズさんにはどんな小さなことでも聞いて来いと言われていますのでね」

ホームズは微笑んで、全員の顔を見回し、

ホームズ　「では事件について、奥方が亡くなったという知らせがあったときに、皆さんはどちらにいらっしゃいましたか？」
ゲイツ　「私は、書斎でジョンソンさんにその日の報告をしておりました」
ホームズ　「そうすると」
ゲイツ　「はい、ジョンソンさんも書斎におりました」
クスバート　「私は、厨房（ちゅうぼう）でイヴリンに手伝ってもらって翌日の仕込みをしていました」
ローラ　「私は、既に部屋に下がっていました。翌日がお休みだったので外出の準備をしたくて」
ホームズ　「皆さん、知らせを聞いて集まっていらっしゃったんですね」

ゲイツ　「はい。エントランスのベルが大きな音で鳴ったものですから、私とイヴリンが同じくらいに扉にたどり着きました。それから、私がジョンソンさんにお知らせに行き、イヴリンはローラとミス・バートンを呼びにいったと思います」
ホームズ　「ガルシアさんは？」
クスバート　「騒がしくなって私も出ていったのですが、確かしばらくしてから出ていらっしゃいました」
ローラ　「たぶん、奥様のお部屋を物色してたんですよ」
ゲイツ　「ローラ、やめなさい」
ローラ　「だって、ガルシア様のお部屋と逆方向からきましたよ」
ホームズ　「お部屋の並びは、どうなっているんですか？」
ゲイツ　「二階の奥からジョンソンさんのお部屋、書斎（しょさい）、奥様のお部屋、向かいにお子様方のお部屋、ミス・バートンのお部屋となり、階段を挟んで、ガルシア様のお部屋と客間が三つとなっております」
ホームズ　「わかりました。では、今度は銃をお見せいただけますか？」

ゲイツはローラ、クスバートと顔を見合わせて、

ゲイツ　「銃は、現在はこちらにはございません」
ワトソン　「ない？」
ゲイツ　「はい。元々、こちらにあったのはペアになっているものが一そろいと、ジョンソンさんが常に持ち歩く一丁だけでございます。ペアの一丁はミス・バートンのクローゼットから見つかって警察に押収されております。もう一丁は行方不明でした」
ホームズ　「川から見つかった？」
ゲイツ　「はい。その銃でございます」
ワトソン　「……方向性は間違ってはいないのね……」

ホームズ、少し考えてから、ローラに向かい、

ホームズ　「ガルシアさんは、紫のドレスに青い帽子とか、水色のドレスに緑の帽子とか、そういう組み合わせがお好きですよ

ね？」
ローラ　「（驚いて）よく、お分かりですね」
ホームズ　「黄色いドレスに赤の帽子とか、緑のドレスに紫の帽子とか？」
ローラ　「そうです。それでも、奥様がいつもセンス良く直して差し上げていたのですけど……」

ホームズ、軽くため息をついて。

ホームズ　「紫の帽子か……」
ローラ　「帽子が、どうかしたんですか？」

ニールが外から帰ってくる。

ニール　「ホームズさん！」
ローラ　「おかえりなさいませ、旦那様」
ゲイツ　「おかえりなさいませ」
クスバート　「おかえりなさいませ」
ローラ　「……ホームズさん？」
ホームズ　「ああ、ばれちゃいましたね」
ニール　「もしかして、先日来たウィギンズというのは……」
ホームズ　「私です。あまり素性をばらしたくなかったので」
ローラ　「えっ！？　まさか、あなたがホームズさん？」
ホームズ　「お察しの通り、アイリーン・シャーロック・ホームズです。こちらはミス・ワトソン」
ワトソン　「ハンナ・ワトソンです」
ホームズ　「……ミドルネームを省略したな。私だって言いたくないのに」
ワトソン　「作者の特権ね」
ホームズ　「なんだそれは」

ニール　「そんなことより、こんなところで何をやっているんです？　ミス・バートンの容疑はまだ晴れないじゃないですか！」
ホームズ　「ああ、それはですね」

ロサが帰ってくる。

ロサ　「ただいま。ニール、こんなところで何を騒いでいるの？」
ニール　「……ホームズさんがいらっしゃってるんだ」
ロサ　「ホームズ？　どこに？」

ホームズ、ロサの前に立ち。

ホームズ　「改めまして、マダム、アイリーン・シャーロック・ホームズです。この度はジョンソン夫人を殺した人物を特定に参りました」
ロサ　「……何の茶番なの？　犯人なら、家庭教師が捕まったでしょう？」
ニール　「彼女は無実なんだ」
ロサ　「ニール、あなた、優しいにも程があるわよ。証拠があるじゃない」
ホームズ　「そう、証拠です。でも、果たして銃で人を撃った人間が、自分のクローゼットにその銃を放り込んだままにしておくでしょうか？　それこそが、ミス・バートンの無実を証明しているように思えてならないのです」
ロサ　「（軽蔑したように）そんな、殺人犯の気持ちなんてわかりませんよ」
ホームズ　「そうですか？　では説明いたしましょう、マダム。じっくりとね」

ホームズ、にっこりと微笑む。

ホームズ　「（ニールに向かって）その前に、ジョンソンさん、お電話をお借りしてよろしいですか？」
ニール　「あ、ああ、いいですが……」
ホームズ　「料金は請求書から引いておきます」

ゲイツ　「こちらでございます」

ホームズ、ゲイツに連れられて去る。

ワトソン、残された面々を見回し、慣れたように、

ワトソン　「ではホームズが戻ってくる前に、もう少しリラックスできる場所に移動しません？」

ローラ　「（ハッとして）皆様、こちらへどうぞ」

全員、応接室に移動する。

シーン7：

ジョンソン邸の応接室。

ニールとロサは不機嫌そうに、ローラとクスバートは不安そうに入口に留まっている。

ワトソン　「まぁ、素敵なお部屋」

クスバート　「あの、私はそろそろ失礼して……」

ワトソン　「（遮るように）ああ、駄目です、ここに残ってください。まだホームズが訊きたいことがあるかもしれません」

クスバート　「でも……」

ワトソン　「ジョンソンさん、よろしいですわよね？」

ニール　「ええ、もちろん。（ローラとクスバートに）お前たち、ここに残りなさい」

ホームズとゲイツが部屋に入ってくる。

ホームズ　「皆さん、場所を移動したんですね。さあ、リラックスして、椅子にお座りになってください」
ロサ　「まあ、あなたの屋敷ではないでしょう？」
ホームズ　「マダム、あなたの屋敷でもありませんよ」
ロサ　「……」
ニール　「それより、犯人が分かったんですか？」
ホームズ　「（答えず）マダムにもご質問させてください。ジョンソン夫人が亡くなった時刻にはどちらにいらっしゃいましたか？」
ロサ　「……部屋におりました」
ホームズ　「では、遺体（いたい）が発見されたと知らせがあったときは？」
ロサ　「信じられなくて、マリアの部屋に行ってみました」
ホームズ　「そうですか。その時、夫人の部屋に帽子はありましたか？」
ロサ　「（驚いて）帽子？」
ホームズ　「そう、帽子です。（千切れたような布切れを見せて）こちらのね」
ロサ　「見つかったんですの？」
ホームズ　「ええ、川から上がったそうです」
ロサ　「見ておりませんわ。マリアがかぶって出かけたのではありませんの？」
ホームズ　「そうですね、あの晩、水色の帽子をかぶったジョンソン夫人を見かけた方がいらっしゃいましたからね」

ロサとホームズ以外の全員は、戸惑ったように顔を見合わせる。

ロサ　「そうでしょう。マリアはその帽子を好んでおりましたから」
ニール　「失礼、ホームズさん……水色？」
ホームズ　「ジョンソンさんには水色に見えませんか？」

ロサ、ハッとする。

ニール　「ええ……紫色、に見えますが」
ホームズ　「ガルシアさん、あなたにはこれが、水色に見えますか？」
ロサ　「……」
ホームズ　「（軽くため息をついて）ガルシアさん、失礼ですが、過去に頭を打たれるような事故にあったことは？」
ロサ　「……」
ニール　「そういえば、マリアが不幸なことがあったと言っていたな」
ホームズ　「事故の後遺症で、色覚に異常をきたしてしまったのですね？　そしてそれをご存じなのは、この屋敷ではジョンソン夫人だけだった」
ワトソン　「それで夫人に服をチェックしてもらっていたのね」
ホームズ　「後天的に色覚異常が起こると、まれに青い色がわからなくなる。そうすると何故か、紫も青も緑も似たような灰色がかった色に、オレンジ色や黄色は似たようなピンクに見えてしまうそうです。もしかして、それはジョンソン夫人が原因だったのではないですか？」
ロサ　「……何か、思い違いをしていらっしゃるようですわ」
ホームズ　「そうでしょうか」

ホームズ、ロサに向き直って、

ホームズ　「あの日、あなたは緑のドレスを青いドレスと、紫の帽子を水色の帽子と勘違いしたまま、ちぐはぐな格好でジョンソン夫人のフリをして、こっそりとミス・バートンの後を追いましたね？」
ロサ　「……そんなことはしておりません」
ホームズ　「橋の傍であなたはミス・バートンが夫人に罵倒（ばとう）されて逃げ去るのを待って、夫人に近づき撃った。そして遺体が発見された際の混乱に乗じて、ミス・バートンのクローゼットに銃を隠した」
ロサ　「そんなことはしておりません」
ホームズ　「どうして夫人とミス・バートンの密会を知りえたかは、想像ですが、ミス・バートンからの返事のメモを見てしまっ

たのではないですか？」
ロサ　「そんなことはしておりません！　全て、あなたの想像でしょう？」
ホームズ　「そうです、悲しいかな、全て想像で証拠はありません」
ロサ　「馬鹿なことをおっしゃらないで。ニール、何とかしてちょうだい」
ニール　「……ロサ、君がマリアを殺したのか？」
ロサ　「ニールまで馬鹿なことを」
ホームズ　「証拠はないのですが、最近開発された新しい捜査方法で、糸くずから織られた布を特定する方法ができたのですよ。ですから、先ほど電話で警察に、遺体に紫色の糸くずが付いていないか、ありとあらゆる方法で探すように依頼しておきました」
ロサ　「……糸くずが出てきても、マリアが帽子をかぶって出かけたのなら、当然でしょう」
ホームズ　「いいですか、ガルシアさん、夫人はあの日は帽子をかぶっていなかったのですよ」
ロサ　「そんな証拠がどこにあります？」
ホームズ　「目撃者がいるんですよ」
ロサ　「見間違いではないと言えますか？」
ホームズ　「ええ。夫人と真っ向から対峙していた人物、ミス・バートンです」

ワトソンが驚いたようにホームズを見る。
間。

ロサ　「……そんな、犯人かもしれないのに、あの娘（むすめ）が言っていることなんて信用できませんわ」
ホームズ　「そうですか。でも、どちらにしても、遺体のどの部分から発見されるか……もし、爪の間にでも挟まっていたら、どういうことでしょうね？」

ロサ、じっと帽子を見つめていたかと思うと、いきなりホームズにつかみかかって奪おうとする。
ワトソンが素早くロサを羽交い絞めにする。

ワトソン　「いけません、ガルシアさん」

ロサがあきらめて大人しくなると、ワトソンがロサを椅子に座らせる。

ホームズ　「あの夜、何があったのか話してくださいますか？」
ロサ　「……お察しの通り、ミス・バートンのメモを見た私は、今まで考えてきたことを実行に移す機会だと思いました」
ホームズ　「今まで考えてきたこととは？」
ロサ　「マリアとあの家庭教師を排除して、ニールと結婚することです」
ニール　「一体、何を言ってるんだ？」
ロサ　「ニール、あなたペルーでは『マリアより先に出会っていればよかった』と言っていたじゃない」
ニール　「そんなもの、単なる社交辞令だ」
ロサ　「イギリスに来てからも、とても優しくしてくれたわ。マリアにはつらくあたっても、私にはとても礼儀正しく穏やかで……」
ニール　「興味がない相手だからだ。そんなことくらいで勘違いするなんて……」
ロサ　「マリアは私に良くしてくれたけど、それはこの目のせいよ。そう、あの事故のせい。あの事故は、マリアの父親が車の運転を誤ったの。それをあの子は負い目に感じていたのよ」
ホームズ　「それで夫人を頼って、イギリスに？」
ロサ　「……最初は、ニールと一緒になれなくても、傍にいられれば良かった。でも、あの家庭教師がニールの気をひいているのを間近に見て、耐えられなくなったの。あの二人がいなければ、私はニールと結婚して、幸せになれるのに。だから、マリアにニールを私に譲ってくれとお願いしたのよ」

回想。トール橋のたもと。
マリアの背後にロサが立っている。

ロサ　「マリア、私たちのこと、認めてちょうだい」
マリア　「ロサ、どうしてここに……」

ロサ　「昼間、ミス・バートンのメモを見てしまったの」
マリア　「お願いよ、ロサ、屋敷に戻って」
ロサ　「ねぇ、マリア、わかってるでしょ？　ニールと別れて」
マリア　「何を言っているの？」
ロサ　「私たち、ペルーにいたときから気持ちが通じ合っていたわ」
マリア　「馬鹿なことを……そんなわけないでしょう？」
ロサ　「ニールは、私がマリアよりも先に出会っていたら、私と一緒になりたかったって言ったわ」
マリア　「ロサ、ニールはそういうことが簡単に言えてしまう人なの。あなたもわかってるはずよ」
ロサ　「それでもいいのよ。マリアはもういいでしょ？　ニールのつらい仕打ちに耐えていることないじゃない」
マリア　「……それでも私はあの人を愛しているの」
ロサ　「愛する人だからこそ、解放してあげて」
マリア　「それであなたが後釜（あとがま）に座るの？　ありえないわ。あのグレイス・バートンがいるんだもの」
ロサ　「あんな娘（むすめ）、すぐにいなくなるわ」
マリア　「……とにかく、今は屋敷に戻って。あとで話しましょう」
ロサ　「私から色を奪ったのに、あなたは私のことは考えてくれないのね」
マリア　「父のしたことは申し訳なかったと思ってるわ。でも、それとこれとは」
ロサ　「叔父様が私に選挙の手伝いを頼んだりしなければ、今頃、私だってニールのことは良い思い出として、ペルーで幸せに暮らしていたわ。結婚だってしていたと思う。でも、そういった幸せとは縁がなくなってしまったのよ」
マリア　「結婚することだけが幸せとは限らないわ」
ロサ　「あなたはこんな世界に生きていないからわからないのよ。どうして私だけがこんなに不幸なの？」

ロサはバッグの中から銃を取り出し、銃口をマリアに向ける。

マリア　「ロサ、何を……！」
ロサ　「私はもう、ニールを譲ってもらうと決めたの」

マリアはロサが銃を構えながら震えているのを見て、

マリア　「あなたの思い通りになるとは思わないけど……ロサ、あなたは私の大事な大事な従姉妹だったわ」

回想終わり、ロサがホームズに向かって話し出す。

ロサ　「マリアは笑って『この帽子は似合わない』と言いながら、私がかぶっていた帽子をむしり取り、リボンを引きちぎりました。それからあの子も銃を取り出して……」

ホームズ　「ジョンソン夫人は、恐らくあなたを撃つ気はなかったと思いますよ」

ロサ　「……そうかもしれません。でもその時はわからなかった」

ホームズ　「……」

ロサ　「それから私に向けていた銃を下ろして、私に背を向けました。それで今、撃たなければやられると……」

ホームズ　「そう思って引き金を引いてしまったのですね」

ロサ　「……マリアが倒れると同時に、彼女の銃がものすごい勢いで何かに引きずられて、あっという間に見えなくなってしまいました。帽子は気が付いたらどこにも見当たらなくて、慌てて屋敷に帰りました。あとはホームズさんのご想像の通り、ですわ」

ニール　「なんてことだ……！」

ロサ　「……私だって、好きな人と一緒になりたかったんです」

ニール　「好きな人？　勝手な君の思い込みで、とんでもないことをしでかしてくれたな」

ワトソン　「（咎めるように）ジョンソンさん」

ホームズ、部屋のドアを開けるとコヴェントリーが立っている。

ホームズ　「……さあ、コヴェントリー巡査部長、お聞きになりましたか？」

コヴェントリー　「はい、しっかりと」

ホームズ　「ご本人もこうやって罪を告白していらっしゃいます。どうか理解のあるご対応を。（ロサに向かって）ガルシアさん、

行けますね？」
ロサ　「……はい」
コヴェントリー　「部屋の外におりますのでご準備を」
ローラ　「お手伝いいたします」

ロサ、ローラに支えられながらコヴェントリーとともに出ていく。

ニール　「とんでもないことだが……グレイスの無実がわかってよかった」
ホームズ　「ジョンソンさん。いいですか、今回のことは、全て、あなたが招いたことです。それをお忘れなきように」
ニール　「……あなたに説教されるいわれはありません」

ホームズはワトソンを促しながら、

ホームズ　「わからなければ、それでも結構。もう二度とお目にかからずに済むことを祈りますね」
ワトソン　「ジョンソンさん、請求書をお楽しみになさいませ。お金に糸目はつけないのでございましたわね。必要経費はしっかりご請求させていただきますわ」
ニール　「結局、金か」
ホームズ　「なんとでも。さあ、行こう、ワトソン」

ホームズとワトソン、去る。

シーン８：

ウインチェスター。警察署。

ホームズとワトソンはミス・バートンの釈放を待っている。

ワトソン　「でも、糸くずから布地が特定できるようになるなんて、ずいぶん新しい捜査方法ができたのね」
ホームズ　「ああ、そんなものはないよ」
ワトソン　「ええ？　またお得意のはったり？」
ホームズ　「証拠らしい証拠がなかったからね」
ワトソン　「……『ジョンソン夫人は帽子をかぶっていなかった』というミス・バートンの証言も、はったりでしょう？」
ホームズ　「……（肩をすくめる）」
ワトソン　「あーあ、糸くずから布地を特定なんて、どんな捜査方法か期待したのに」
ホームズ　「いつか必ず、そういった科学的な捜査ができるようになるさ。いつかね」
ワトソン　「まだ、かなり先になりそうね……」

釈放されたグレイスがやってくる。

ホームズ　「ミス・バートン、釈放おめでとうございます」
グレイス　「ホームズさん、ありがとうございました」
ホームズ　「いえ」
ワトソン　「この後は、ジョンソンさんと？」
グレイス　「ええ、ニールさんが迎えに来てくれていますの」
ワトソン　「お幸せに、と申し上げたほうがよろしいようですね」
グレイス　「まあ、それはわかりませんわ。ニールさんが、さらに霊的なものに理解を示してくださらないと」
ホームズ　「ミス・バートン」
グレイス　「はい」
ホームズ　「今はまだわからないかもしれません。ですが、あなたがジョンソン夫人になさったことは、必ず自分に返ってきますよ」
グレイス　「どういうことでしょう？」

ホームズ　「ジョンソンさんは、北米の女性にないものを求めて、南米の情熱的な美しい女性を手に入れました。そしてその女性に飽きると、情熱的な女性にないものを求めて、イギリスの女性に手を出そうとしているのです。将来、同じことがそのイギリスの女性に起こらないと言えますか？」
グレイス　「……ニールさんと私は、そういった関係ではございません」
ホームズ　「五年後、十年後に、あなたはどんなに頑張っても今よりは老いているのです。その時、傍（そば）に若くて美しい、例えば東洋の女性がいたらどうでしょう？」
グレイス　「私どもは精神的な結びつきが強いのです。ニールさんが他の女性を求めても、気にいたしませんわ」
ホームズ　「あなたの助言を聞き入れてくれれば、ですか？」
グレイス　「そうですわね」
ホームズ　「では、十年後を楽しみにしておりましょう。どれだけお二人が、幸せになれるかをね」
グレイス　「どうぞご覧になっていてくださいませ」

グレイス、去る。

ワトソン　「……辛辣（しんらつ）ね」
ホームズ　「恋ならまだいいよ。恋ならね。気持ちはどうにもならないだろう。ジョンソン氏のように、いくら言っても隠すつもりのない人も、まあ理解できる。ただ、彼女は……打算的だ」
ワトソン　「それでも、ジョンソンさんに寄付させることによって、助かる人たちもいるのよね」
ホームズ　「そう。物事は多面的に見るべきだ。……気持ちがついていかないだけだよ」
ワトソン　「珍しい」
ホームズ　「ジョンソン夫人は……最後に何を考えていたんだろうね」

間。

ホームズ　「今回の事件は、書くなら結末を変えてくれ」

ワトソン　「結末？」
ホームズ　「ああ。奥方が、復讐（ふくしゅう）のために自殺を他殺に装ったと」
ワトソン　「従姉妹（いとこ）のことは書かずに？」
ホームズ　「最後まで気丈に、復讐をやり遂げたあっぱれな夫人さ」
ワトソン　「それはいいけど」
ホームズ　「それでも、しばらくは発表を控えてくれるといいな。あの気の毒な夫人のことが忘れ去られる頃まで」

間。

ワトソン　「わかったわよ。それじゃあ、スティーブンスのターキーはおごりでね」
ホームズ　「ええ？　丸ごと？」
ワトソン　「大金を稼いだんだから、いいじゃない」
ホームズ　「そうだけどね……」

ホームズ、ワトソンに引きずられながら警察署を後にする。

音楽流れて。

――幕――

参考資料：
『シャーロック・ホームズの事件簿』アーサー・コナン・ドイル（深町眞理子 訳）、創元推理文庫、二〇一七年
コンプリート・シャーロック・ホームズ（https://221b.jp/）

『シャーロック・ホームズ語辞典』北原尚彦・えのころ工房、誠文堂新光社、二〇一九年
『シャーロック・ホームズ　人物解剖図鑑』えのころ工房、株式会社エクスナリッジ、二〇二三年
『シャーロック・ホームズの科学捜査を読む　ヴィクトリア時代の法科学百科』Ｅ・Ｊ・ワグナー（日暮雅通 訳）、河出書房新社、二〇〇九年
『ヴィクトリア朝の女性たち　ファッションとレジャーの歴史』山村明子、原書房、二〇一九年
『ヴィクトリア時代の衣装と暮らし』石井理恵子・村上リコ、新紀元社、二〇一五年